

柞乃杜

報社神社父秩
柞乃杜（ははそのもり）

第 3 号

平成 2 年 12 月 23 日
（天皇御誕生日）

御大典記念



世直しの業

めでたく秋の御大典が成り

日つぎの御子が正しく日の御子となられて

象徴君主たる天皇が平成の世を拓かれました

我が国は悠久の昔より天皇即位をもって時代が改まり
国民は心を新たに
して世直しの業に尽くしてきました

平成の世直しは殊の外きびしいもので

世界に重きをなす日本の国民として

地球規模の発想に立つ心根が大切です

小さな生命を大切に
大きな自然を畏敬して

身近な生活のひとこまが遠くの人を苦しめぬように

古人の心を心として
新たな世直しに加わりましょう

黄檗染の御袍

平成の秋

澄みわたる空に向ひて
照り映ゆる銀杏の葉うら
詣で来るやしろに満てる
かぐはしき黄菊の香り

時はいま平成の秋
山峡は錦のころも
山里は黄金の稔り

都には古へぶりの
日の御子の世継ぎの祭り
わが里は弥つぎつぎの
国魂の山野の祭り

時を得て世は改まり
人はみな心も新た
来たるべき冬はあれども
平成の秋は満ちたり

解説 秩父神社(三)

禰宜 浅見 武史

◆ 妙見信仰との習合

秩父神社が、律令国家の神社制度の確立と共に、次第にその地歩を固め、『延喜式神名帳』にその名を載せられ、武蔵国四十四官社の一社として、国の祭祀、即ち当時の神社祭祀のうち、毎年の祈年祭にあたり、特別に武蔵国の国司からの幣帛である国幣が奉られ、中央神祇官により、祭祀の指導と神社管理の上に手厚い保護を受けて、秩父地方の諸神の上に、ゆるぎない地位を築いたのは、遠く貞観年中(八五九年—八七七年)の事であった。



その後、承平・天慶の乱を契機に、律令体制は崩壊の兆しをみせ、国家の神社政策は急速に変化した。天平神護(七六五年)から元慶年中(八七七年—八八五年)にかけて、盛んに全国の神社に授与された神階増進の記載も、殆ど正史に残されなくなった。この律令体制の衰退と共に、各神社も律令的神社経営から、地域的基盤に基づく神社護持の必要性に迫られた。この時期、官に代わって神社管理に介入してきたのは、莊園を母胎として地方の実力者となった武士の一団であった。平良文を祖とする秩父平氏によって、この地に勧請されたという妙見菩薩と秩父神は習合し、秩父地方における神仏一体の信仰の端緒をつくり、その後の大宮郷妙見社としての、永い歴史の基礎を形成することとなった。

古伝によれば、天慶年間(九三八年—九四七年)、『平良文が、平将門と武蔵上野の境、染谷川に合戦の折、久留間息災寺の妙見大菩薩の奇瑞ありて、将門を撃破す。故に良文、妙見菩薩の奇瑞を畏みて、篤い崇敬を捧ぐ』と伝える。平良文について、今昔物語『源宛と平良文と合い戦う語』の中で、智・武・勇に優れたる武士として描かれている。

◆ 妙見大菩薩



仏教では、『七仏所説神呪經』が語るように、この菩薩は北辰菩薩とも言つて北極星を指し、この星が諸星の王であるところから、尊星王とも崇められた。妙見とは、群星中で最勝の験力をもち、よく奇瑞を顕すのでこの名があるという。早くから陰陽道との交渉があつて、特に玄宮北極とされ、北方守護の聖獣、玄亀がこの菩薩の神使であつた。また北斗七星の信仰とも混同されて、七星八宿の占星術にも結び付き、平安末期以来、民衆の運勢や現世利益の祈願対象として、全国的によくもはやされた流行神であつた。

秩父妙見の神格は、秩父平氏の武士にとつては、弓矢守護の仏天、戦勝の奇瑞を垂れる畏き神であり、偏く民衆にあつては、富貴延命、壊災招福をもたらす尊き菩薩として、多くの崇敬が寄せられた。特に中世以後の庶民的受容は、日常生活に基づく現世幸福の要望である。養蚕・機織の神としての傾向が強く、この信仰

の結果が、秩父絹の盛業となり、江戸期の絹大市と繋がっていくのである。

また、北斗七星に由来する七所妙見は、当秩父妙見の分霊を、郡境の交通要所七ヶ所に祀り、壊災の守り神とした。即ち、小鹿野町藤倉にあるのを第一所とし、皆野町金沢、長瀬町矢那瀬、東秩父村安戸を第二、三、四所とし、旧外秩父の都幾川村大野、名栗村、吾野北川にあるのと合わせて七所とした。北斗の衆星が、北辰のその周囲を占める意である。井上靖氏の小説『孔子』の中で、『北辰その所に居て衆星これを囲む。次に衆星これを迎う。更に衆星これを捧ぐ。最後に孔子の言葉として、衆星これを廻る』とのくだりがあり、北辰と北斗衆星のつながりを描いている。

満天の星空のもと、ひとときわ北辰が光輝く十二月三日。平成の御大典を祝い、一段と夜空を彩る大花火。妙見菩薩の神使、御旅所斎場、亀の子石の背に神幣を奉安し、無数の献灯を高く掲げて、歴史と信仰に培われた秩父妙見祭は、夜更けて賑わうのである。



平成は文化の時代

宮司 蘭 田 稔

天皇即位の御大典は、国民のあいだにさまざまな波紋を起しながらかも、盛大裡に完了し、これをもって我が国にふさわしい平成の時代が拓かれたことはご同慶の至りであります。

一 奉祝行事を終えて

当社といたしましても、去る十一月十二日の即位礼当日祭に続いて同十二日に大祓、翌二十三日には大嘗祭当日祭を多数の参列者を迎えて斎行することができました。また、十二月二日の例大祭宵宮の新穀奉献祭をもって御大典奉祝の行事とし、特に宮地、上町、中町、本町の四屋台が境内に曳き入れられて賑やかな奉祝行事となりましたことも、まことに喜ばしいことであります。

なお、中央の奉祝行事として十一月十七日に東京都心で催された五万余人の大奉祝パレードには、当社氏子青年会の有志四十二人が上京し、新調した自慢の袴纏姿で皇居前広場まで行進し、両陛下出御の奉祝式典に参列したことも意義深いことであります。

さらに特筆すべきことは、氏子青年会を主力とした各町内有志による御大典期間中連夜の巡回警備であります。申すまでもなく、心ない極左過激派の卑劣な放火によって各地の神社が焼失の被害を被っているさなか、同会は自主的に夜間の警戒を続けて下さり、毎晩、各町内二十名ほどの会員や有志が深夜まで境内をくまなく巡回し、なかでも大嘗祭前後には役員の皆さんが、朝まで徹夜の奉仕をしてくださったことは、私ども職員一同にとつて何よりの励ましとなりました。しかも、引き続きの十二月三日の例大祭には、そうした方々を含めた約八百名の地元消防団員が、大勢の警察官に交って神幸祭見物の大群衆の整理誘導に当たって下さったのです。

警察・消防のご当局の格別なご尽力はもとより、こうした方々の真剣で無償のご奉仕を賜ってこそ、当社職員も安んじて奉祝祭や例大祭諸神事を精一杯勤めることができたのであります。この紙面を借り、警察・消防ご当局およびご奉仕の皆さんに対して、秩父神社と当社奉賛会を代表して厚く御礼申し上げます。

二 都市型文明の現状

こうして御大典をお祝いする諸行事をすべて盛儀のうちに終えた今、改めて今後、われわれ国民が平成の時代をどう築いていくか、を考えてみる必要があるでしょう。

とりわけ、東京という大都市圏に近接しながら、深い山並に囲まれて独特の豊かな風土をまだ失っていない秩父郡市の住民として、私どもは今度こそ真剣になって、誰にでも魅力ある生活社会を造り上げるよう努力しなければならぬのです。

すでに何度も申し上げているように、日本の社会はすでに、昭和時代をもって都市化を完成し、今や、都会と田舎を問わず都市型文明に立つ段階にいたっています。もはやどんな田舎にも車が使われ、電化製品が溢れてテレビや電話が、都会の情報をつんだんに伝えてくれます。たとえ、秩父の山奥にいても、都会並の便利な生活ができるのです。

ところが残念なことに、昭和の時代は豊かなモノとカネの物質文明を求める余り、自然の風物を犠牲にして、心のバランスが失われるのを敢て見ぬ振りをしてきた時代でもありました。かつて日本人のあいだには山川草木すべてに霊性があるという観念がゆきわたり、人にも自然にも共通の仏性があって「悉皆成仏」、つまり万物がおのづからに神仏であるという達観を備えておりました。万物がそのところを得て生命を分かち合う世界こそが、死者も生者も共に安心立命の家郷世界でありました。秩父山地の深い



山ひだに沿う村里や市町にとつては、野山は生業の源であるとともに、それ故にこそ神仏や先祖が鎮まる大切な自然でもあったのです。武甲山に国魂の神を祭り、三峰や両神の山中に修業の場を設けて神仏の靈威を請け、山里一帯に観音靈場を配置して後世成仏の安心世界を風物に描いたのです。

三 家郷文化の再構築を

今や、高度な科学技術を手にした人類は、地球の資源消費や環境破壊にも限度があることを知りました。これからは、地球全体の生態系を壊さぬように我々の生活を考えねばなりません。実はそのことが、古人のゆかしい生命観に習って、もう一度、家郷の靈的世界を見直すことでもあるのです。将来、どんなに科学技術が進んでも、人間の死後が未知であることは昔と少しも変わりません。それなればこそ、せめて生あるうちに物心の豊かに調和した生活社会を取り戻して、子孫に我々の後生を託すのが、おそらく最良の道ではないでしょうか。

文化は物質ではありません。アメリカから輸入してすぐ取り替える類いのものではないのです。文化は、民族の歴史風土に根ざしています。我々は、日本の歴史風土に生まれ、日本語の世界に育ち、日本人の社会に生きていくのです。この事実は、これから国際化が進めば進むほど、かえって強く実感することになるでしょう。多くの異文化と交流するにつれて、日本人が厭でも日本人であることを自覚することになるからであります。

そうした不拔の伝統文化に根ざしての我々の靈魂觀念も、実はおいそれと変わらない。神も仏もあるものかと口では威勢よく言う輩も、たいていは祭りや葬式に当って、神妙に神仏を礼拝するのです。身近な人の死でもあれば、それこそ単なる社交儀礼などと言いつける者が、はたして何人いるでしょうか。いやしくも自分に生命があることを思い、死後を手厚く供養してもらうことを望むのであれば、いさぎよく先祖に倣い、神仏の靈性を祭るのが筋の通った生き方というものでありましょう。



結び

ともあれ、現代の大都会は、そうした人間味ある生活文化を喪失しています。大東京のコンクリート・ジャングルのどこに、死後の安心をも暖かく包み込んだ靈的共同体が見出せるでしょうか。毎日膨大な量のゴミ処理といっしょに老人や死者が使い捨てられているばかりで、生き甲斐どころか死に甲斐さえも奪われた住民が、それを考える暇までもあくなきレジャー産業の商魂の餌食にされてしまっているではありませんか。

平成の秩父が、こうした大都会のアンチテーゼとなつて、恵まれた風光に靈性を観る家郷世界を再び取り戻すことができさえすれば、心のオアシスとして訪れる人の数は着実に増えることになるでしょう。少なくともリゾート開発で、都会の若者に媚びることだけが、秩父の未来であつてはならないのです。

御大典奉祝祭事

御大典を奉祝し

屋台は境内に曳き据えられ

秩父神楽が奉奏される

当社恒例、例大祭宵宮(十二月二日午後)へ上陛下の御大典を奉祝して、宮地・上町・中町・本町の各屋台が境内狭しと曳き据えられ、同時に神楽殿にて当社付属神代神楽の一「国平の槌」(大黒舞)が奉奏されました。

このことは御大典が、即位礼・大嘗祭・大饗等を中心とした即位儀礼の諸儀(御大禮)に併せて行われる国民の様々な奉祝行事を含むものであり、単なる皇位継承の宮中行事にとどまらず、太古以来、天皇さまを仰いで保ち伝えられてきたわが国の姿を、国民一人一人が改めて再認識し、新帝陛下とともに新しい時代に向けて、志も新たに歩んでいくための重大な意味をもつ儀式で、国民挙つて奉祝の誠を捧げねばなりません。

当地は皇室との縁も深く、過去にも、大正十一年秩父宮殿下御来秩の折、昭和三年、昭和天皇御大典の年、同四十二年埼玉国体での天覧の折と夫々に笠鉾屋台を飾置き、秩父人の誠心を捧げた記録があります。

本年、特に市制施行四十周年の佳節にあたり、当日は日曜日とも相俟つて多くの参拝者で賑わい、また夜には、奉祝の煙火も打ち上げられ、今上陛下の一世一度の御大典をお祝い申し上げたのであります。

天皇陛下ご即位 奉祝大提燈パレードに参加して

秩父神社氏子青年会

会 計 高 野 俊 彦

この四月に結成された「氏子青年会」は、蕨田稔宮司を名誉会長として、市内各地区より会員を募り、現在四七〇名にも及んでいます。「秩父神社」を青年結集の場にし、その郷土愛に燃えるところを語り、学びあうなかで若者の自由な発想のもと、郷土文化の継承と発展につくすことを主な目的としています。また、今年度の活動には、平成の時代の幕開けとなる天皇陛下御即位御大典（即位礼や大嘗祭など）の勉強や奉賛もその一つとしました。そこで天皇陛下御即位奉



祝委員会と天皇陛下御即位奉祝国会議員連盟主催、総理府・外務省・文部省・自治省などの後援の「祭り」と光のフェスティバル（第一部「日本の祭りパレード」・第二部「大提燈パレード」）といった中央の奉祝事業に参加しようとして、蕨田稔宮司も同行され、総勢四十二名で繰り出すこととなりました。

平成二年十一月十七日（土）

一〇時〇〇分：予定の時刻には全員の集合が終り、蕨田武男名誉宮司や浅見武史、綱宜ほか神社の方々の見送りを受けて出発。日本晴れの中、秋景色の深まり行く秩父路から花園ICへ。さらに関越自動車道・首都高速道路を経て銀座方面へ。

一四時〇〇分：銀座の日航ホテル近くに到着。かねて用意の氏子青年会の絆纏を着用し、ここからは徒歩で集合場所へ。

一四時二〇分：指定の銀座七丁目のヤマハホール前に到着。高張提灯や横幕の支度をする。この間にもご即位の奉祝にかけつけた都内や地方からの人々が増え続け、私たちへも紅白の提灯がどこで手に入るのかなど尋ねる人々や、私たちの提灯を是非欲しいという人まで現われ、あわただしさがましてくる。

一四時三〇分：第一部の開会セレモニーが目前で始まる。国会議員連盟会長の竹下元首相などの挨拶や天皇陛下万歳の三唱ののち、清原選手などのオーブンカーを先頭に、さまざまなマーチングバンドの行進が始まる。山王祭の山車や、島根



県津和野のさぎ舞いなど全国からの祭パレードを見る。なかに「標山」もあり、かつて悠紀・主基の国々からの標山を都大路で奉曳したことが民による奉祝であったこと、また標山は祇園・高山・秩父などの山車、とくに笠鉾などの山鉾の原型であることなど、大嘗祭についての勉強会で学んだことを改めて思い出す。

一六時三〇分：第二部「大提燈パレード」出発。誘導のウグイス嬢の「天皇陛下万歳」の発声と共に、「万歳」の音がビル街にこだまし、紅白の提灯の波が揺れる頃には、辺りも暮れ始め、手にした提灯の明りも次第にはつきりとしてくる。奉祝のムードが満ち溢れるようになったところで日本橋へ向けて出発となる。私たちは、秩父神社の菊のご紋の高張提灯を先頭に、「奉祝天皇陛下御即位御大典」秩父神社氏子青年会」の横幕に続く。新調されたばかりの絆纏の効果で、行列の見栄えもよく、秩父を知るさまざまな人々から声をかけられたり、一緒に歩いたり、秩父神社氏子青年会ここにありと

するには十分である。日本橋の合流地点では、八代英太国會議員らの出迎えをうけ、万歳の連呼もひととき高くなる。ここで大提燈パレードはひとまず解散だが「十九時三十分、皇居前広場で天皇陛下への万歳三唱を」と、丸ノ内のオフィス街の中をさらに歩き続ける。

一九時一五分：皇居前広場に到着。すでに奉祝の提灯でいっぱい広場では、高橋圭三氏の司会で奉祝式典が始まり、竹下元首相・黛敏郎氏などの発声で、天皇皇后両陛下への万歳三唱がおこなわれる。

一九時四〇分：天皇皇后両陛下が二重橋までお出ましになり、全国から集まった人々の奉祝の波は最高潮となる。最先端のTV技術の大型スクリーンで、両陛下の喜びの笑顔を伺えることもよいが、両陛下ご自身の提灯にて、私たち十数万の提灯の明りにお応えいただいた一体感こそなによりであり、柔らかな光の持つ暖かさ・優しさに包まれたなかで、守り続けた日本の伝統の素晴らしさに参加者一同感動したひとときである。

二〇時〇〇分：皇居前広場を解散となる。二一時〇〇分：東京駅前を出発する。二三時一〇分：秩父神社に無事到着し、解散する。（この夜の神社の警備はとくに本町で引き受けていただいた。）



梟だより



◆即位礼及び大嘗祭当日祭執行

今上陛下の即位礼及び大嘗祭を奉祝し、十一月十二日、二十三日の両日、当日祭が執り行われた。

殊に大嘗祭当日祭の式次第は大祭式に倣い、宮司以下祭員、正服を着装し、荘厳な雅楽の流れの中、厳肅に斎行された。参列者は、秩父市長を始め、郡市を代表される方々。当社大総代、氏子青年会など、百六十名余のご列席を賜り、今上陛下一世一度の大嘗祭を、心を一にしてお祝い申し上げた。

◆氏子青年会の活動

この社報の発刊と共に発足した、当社氏子青年会も、日に日にその活動を増し、盛況のうちに一周年を迎えようとしている。会員数も、当初の予想を遥かに上回り、その若い力が、色々な形で実を結んだ一年であった。



お正月の様々な行事が、今もなお、多くの家庭で守られている。年の暮になると神棚を飾り、水元や氏神様、或はご不浄といったところに御幣をお供えして、門松を立て、歳神様を迎える。

古く伝承を伝える

◆お正月行事について

また、歴史・祭事それぞれの部会主催による勉強会。当社の祭事、或は歴史を禰宜、浅見武史を講師として迎え、熱心な講義が開かれた。

また、本年の年間テーマとして掲げられた「大嘗祭の研究及び奉賛」も、宮司蘭田稔を講師として、講義を開くと同時に、十一月十七日に執り行われた中央奉祝事業には、四十二名の方が代表となり、銀座から皇居前広場までのパレードに参加し、奉祝の意を表した事は、記念すべき足跡となるであろう。



近年では、民俗行事としての正月の意味は、大分薄れ、その過ごし方も大きく変わってきた。専ら、余暇としての性格を強く帯びてきている。確かに、南の島で新年を迎えるというのも、楽しいことかもしれない。しかしその反面、失うものも多いという事を忘れてはならない。

幾時代を越えて、この平成三年、一月一日に、それぞれの家庭を訪れる歳神様は、我々にどのようなお年玉を下さるのだろうか。

◆御大典記念の稲作神事

家では、その様式は更に丁寧なものになる。例えば、部屋の四方にシメ縄を張り巡らし、恵方棚といって、その年の恵方（歳神様のいらっしゃる方角）に臨時に神棚を祀る。そして、正月最初の「子の日」の刻になると、恵方棚から通常の神棚に迎え入れるといった具合である。

氏）の水田を、ご好意によりお借りし、春の田植え、夏の虫追い、秋の収穫と、総て神事を行いながら、また神職も田に入って、手仕事による稲作を行った。一年を通じて稲作を行うのは、多くの会員が始めてという事で、町田氏より手ほどきを受けながらの農作業であった。十月二十日には無事収穫を迎え、「抜き穂」の形に整えられ、十一月二十三日に執り行われた大嘗祭当日祭には、秩父郡市、百四社それぞれの御神前に、神饌米としてお供えされた。





平成の御代を言祝ぎ
新玉の年の始めを
お祝い申し上げます



◆ 秩父神社大総代紹介

前列右より
柳田町 新井 一夫
宮 司 蘭田 稔
中村町 井上 久
名誉宮司 蘭田 武男
上野町 柿原雄太郎
後列右より
番場町 宮前 洋一
野坂町 新井 一永
上 町 松本 眞一
中宮地町 斎藤 信介
左 上
中 町 浅賀 政治

◆ 氏子青年会活動

七月以降の主な活動報告

七月二十四日
夏祭奉仕

七月二十九日

武甲山ハイキング

参加者四十六名、全員無事登頂

八月二十九日

講演会「大嘗祭について」

講師 蘭田 稔 宮司

九月二十二日

歴史部会勉強会「秩父神社」

講師 浅見武史 禰宜

十月 八日

まつり部会勉強会「秩父神社例祭」

講師 浅見武史 禰宜

十一月十七日

大嘗祭奉祝パレード参加

参加者四十二名、午後四時から八時

にかけて、銀座より皇居前広場まで

十一月三日・二十九日

夜間特別警備奉仕

午後九時から十二時まで、神社及び

柞の杜周辺、巡回警備

◆ 氏子青年会々員募集

当社氏子青年会では、引続き会
員を募集しております。歴史・
祭いずれかの部会に所属して戴
き、各種勉強会及びレクリエー
ションを通じて、会員相互の親睦
を深めております。秩父市内に
在住、若しくは主な勤務先を有
する五十歳以下の青年男女の方。
当社社務所までお越し下さい。

編集後記

■今年の秋は比較的暖かく、大銀杏を始め境内の木々の紅葉も、御大典の秋を惜しむかの風情でした。朝夕の寒さも一段と厳しくなりましたが、皆様お変わりなくお過ごしのこととお慶び申し上げます。ここに社報「柞の杜」第三号をお届け致しますので一読下さい。

■畏くも天皇陛下には、めでたく御大礼の諸行事を恙なく行われました。象徴天皇として初めての御即位、大嘗祭について様々な論議が交わされましたが、一世一代に行われる大嘗祭に際して、多くの国民が日本人の心根を持って奉祝申し上げたことは言うまでもありません。東京における奉祝パレード、提灯行列参加の様子を掲載させていただきました。

■当社例大祭も皆様方のご協力により無事盛大裡に肅行できましたこと、改めて御礼申し上げます。特に二日(宵宮)には御大典の記念に屋台四基の境内曳据えが実現し、賑やかさを一層盛り上げていただきました。地元の皆様方にも充分お祭り気分を味わっていただけたものと存じます。紙面の都合上特別記事を掲載できませんでした。お詫び申し上げます。

今後とも内容の充実を心がけたいと存じますので何卒ご支援をお願い致します。

平成二年(一九九〇)十二月二十三日
編集 秩父神社社務所
発行 秩父神社社務所

〒三六六埼玉県秩父市番場町一、一
TEL(0486)22-0262
FAX(0486)24-5596
印刷所 株式会社印刷所
〒三六六 秩父市東町二十七、八